

ジェンダー視点からの防災

堂本 暁子

かつては「災害は忘れた頃にやってくる」と言われたものですが、今は違います。地球規模で温暖化が進み、ハリケーンや洪水、地震や津波といった巨大災害が頻発し、人間の生活にさまざまな影響を与えています。災害多発時代です。特に日本は、山や丘陵が多いため大雨による土砂災害が起きやすく、極めて厳しい条件下にあるので、平常時から個人的にも、地域や国としても、災害に備えることが求められています。

なかでも、ジェンダーの視点からの備えが大事です。2011年3月11日に起きた東日本大震災は、地震・津波・原発事故の三つが重なった、極めて大規模な災害でしたが、三週間後に避難所を訪れて驚いたのは、間仕切りもなく、被災した家族が雑多にブルーシートの上に座ったり、寝たりしていた姿でした。セクハラの心配さえあり、女性たちは、さまざまな不都合や不便に直面しながらも、困難に耐えなければなりません。原因の一つは、男性中心の避難所運営で、女性の意見や要求が反映されませんでした。しかし、三度の食事や洗濯、子どもたちの学びや遊びなどについて一番よく知っているのはお母さんたち。三ヵ月ぐらいして女性たちは立ち上がり、声を上げ、避難所改革に取り組みます。女性の底力です。

政府は2013年に「男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン」をまとめ、災害時に女性が果たす役割が大きいこと、意思決定の場への女性の参画、リーダーとしての活躍の重要性などを明記しました。2020年には改訂版として「災害対応力を強化する女性の視点～男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン～」を策定しています。しかし、都道府県の防災会議における女性の割合は、まだ平均16.1%（2020年）。今年は、女性委員を増やしたいものです。と同時に、今、求められているのは、一人ひとりの女性が身近な備えを自分事として実行・実践すること。災害が起きてから慌てたのでは遅すぎます。



PROFILE

どうもとあきこ：男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表、女子刑務所のあり方研究委員会委員長。TBS 記者・ディレクター、参議院議員、千葉県知事を経て現職。2021年10月、安全安心なまちづくり関係功労者内閣総理大臣表彰を受賞。近著に『声なき女性たちの訴え—女子刑務所からみる日本社会』（堂本暁子著、名執雅子編著、小学館集英社プロダクション、2021）。